遼の哀册發見の端緒

―ミュリー神父の他の『横顔』―

衞藤利夫

本誌八月（第六七）號で小村侯圖書館の大脇君が『ミュリーの横顔』と題して、偉大なる中央亞細亞探險者スエン・ヘデインの名著『皇帝の都・熱河』(1)にほんの一寸ばかり顔を出して居る、しかし非常に印象的な一歐人學者の『横顔』を紹介して居られるのを興味深く拜見、さすが大脇君で、その着眼の凡ならざるに敬服した。言語學のことは自分には解らぬが、滿洲建國以前の熱河と云つたら、索莫たる蒙古の邊陬、そこに僅か二、三十人の土民信者を對手に孤城のやうな天主堂を護つて、コツコツとして支那北境諸民族の地方語を研究し、埃り臭い古い典籍の堆かく積まれた書架に圍まれて居て、書き卸しの手稿が身邊に重ねてあらうと云つたやうな、いかにも蕭條たる、孤高なミュリーさんの生活振りにまづ心を惹かれた。支那服を着て長い煙管を手にした、この長身銀髯の人が、眼鏡の奥に生き〳〵とした眼とフランス語とで、心から嬉しさうにヘデインを迎へた場面がいゝ。

ヘデインがそこで見かけたと云ふ地方語研究の英文未刊のマヌスクリプトが、果して大脇君が大連圖書館から借出したと云ふ本(2)であつたかどうか判らぬが（恐らく左樣であらうとは思はれるが）兎にかく本らしい本當の本はそれが書かれた情景、著者の生活や風貌を知ると、その内容以外に、得も云はれぬ懐しさを湧かせるものがある。これはこの頃市場に氾濫する『印刷せられた紙屑』と異つて、殆しくも本と云はれ得る本にのみ備はる一種の匂ひとでも云ふべきものであらう。

果して大脇君が心を惹かれた點も、本の題目内容よりむしろその人の『横顔』だつたやうである。

ところでこのミュリー神父の横顔と云ふことになると、ヘデインが素描したあの一節も愉快だが、更にわが滿洲建國と云ふスクリーンにクローズ・アップされた他の大きな一面の横顔を見のがすわけに行かぬ。

昭和五年、卽ちミュリーさんが『現職のまま支那學教授として故國に呼返された』と云ふ一九三〇年の秋から一年經つて、昭和六年の秋が滿洲事變、それに續く翌年の春の建國と云ふ、火事場と大工小屋とが一緒になつてごつた返したやうなドサクサの間に、奉天商埠地の三經路に、やつと出來上つたばかりであつた、當時の熱河督軍湯玉麟の別邸の裏庭の塀に添うて、こゝまで運び込まれたばかりの、二十個前後の大石塊が放置してあるのが發見された。それがなんと遼の帝王、帝后の碑で、從來熱河の奥、今日で云へば興安西省のワール・マンハの峽谷にあるものとばかり思はれて居たものだ。その中には問題の、契丹文字の哀册もあつた。このことについてはその後多數の人々が書き、自分も、曾つて、その頃までは鐵道もない山河幾百里を、しかもこの重いものを、何でまた奉天まで運んだかと云ふ、謎のやうな事件を說明すべき臆測を書いたこともあるが、兎に角その時分はそんな物情騒然たる間に、これはまた餘りに風變りな、足許から鳥が立つたやうな事件で、優にそんなことに關心



奉天に運んだまゝの碑石（今は國立博物館にあり）

ある學者はもとより、吾等のやうなアマチュアにとつても可なりショツキングな一挿話たるを失はなかつたのである。

昨年の秋の今頃だつたと思ふが、高句麗新城發掘の爲に撫順に來て居られた池内宏博士と共に、渡邊撫順館長の案内で秋の山路に、野菊や女郎花のしとゞ亂るゝ間を、清の太祖ヌルハチの足跡を追ひ乍ら鐵脊山の頂きに、今は大根畑となつた汗王殿（ハンワンでん）の趾を訪ねた時、池内さんが云はれたものだ、『何と云つても滿洲建國は難有いものさ、吾々は今日熱河にでも平氣で行くが、これが建國前だつたら、日本人が熱河に行くなど〳〵云ふことは今日で云へばまづ西藏の拉薩（ラッサ）に行くと云ふほどのことで、吾等は生きてその地を蹈めるものとは思はなかつた』と。それは東京の帝大の教室から考へられたことで、吾等奉天に住んで居てさへ、熱河に行くなどと云ふことはたゞ想像の上にのみ在り得ることだつた。渾河の堤防に立つて、遼西の野であらう、地平線の向うの、西に臼づく赤い夕日を眺めて、あの方角に熱河がある、熱河のズウツと奥の、小興安嶺の山の中に行くと、遼の帝王、皇后たちの碑石がうんとあつて、そこには支那の歴史にたつた五字しか傳はつてゐないと云はれる契丹民族の文字がいくらでもあると云ふことだと、よくそんなことを話題にした。この話題の出所は正確で決してよくあるデマの類ひではない。こんな話題を吾等に提供したその報告者の一人が、こゝに云ふところのミュリー神父だつたのだ。

ミュリーさんは何時から熱河にゐたか知らぬが、遼代の慶州の故趾を研究した結果の力作を、佛蘭西の支那學研究の最高權威と仰がれてゐる『通報』（トウンパウ）に發表した。それは『蒙古巴林に於ける大遼國の故都』と題する論文であつたが(3)それが一九二二（大正一一）年。その發表があつた同じ年の夏六月二十一日に、ミュリー師とは別にこれもやはりあの地方に居たケルキン（P. P. L. Kervyn）と云ふ神父さんが白塔子の東北二十五支里の地點にある人跡稀れな國境の峽谷に、遼の東・西・中の三陵を探險した。そして不完全乍ら契丹文字の哀冊の碑面の文字を摸寫して來た。その探險報告がその翌年の『北京カトリック雜誌』（Le bulletin Catholique de Pékin. 1923）の六月號に發表せられた。

これと前記『通報』所載のミュリー師の論文により、注意を喚起された人が少くとも世界に二人居た。一人は前記『通報』

の編輯者である佛蘭西のペリオ博士で、今一人は京都帝大の羽田亨教授だ。ペリオ博士は直ちにケルキン氏の筆になる踏査記事に自分の意見を附けて、これをやはり『通報』誌上に載せ(4)羽田さんはやゝ遲れて、大正十四（一九二五）年の『史林』誌上にそのことを書いて居られる。(5)『通報』所載のケルキン氏の記事は、本誌のこの號に僚友平山君を煩はしその邦譯全文を掲げることにした。

何でもその頃だつたかと思ふ、奉天の滿洲醫大に居てよく圖書館に來た獨逸人支那學者のフックス君が、『プロフエツサア・ペリオが、こちらに駐在してるあちこちの佛蘭西領事に手紙をよこして、しきりに遼碑の拓本を手に入れようとして居るらしい』と云つて居た。自分の臆測ではこのペリオ博士の執心と、或はあり得るであらう佛蘭西政府の、南京蔣政府に對する動きが、やがて熱河の湯玉麟父子によつて、この數十個の大石塊が奉天まで運ばれたと云ふことに、因果の作用をして居はせぬかと思はれる。



碑石拓本作業（座せるは京城帝大の鳥山教授）

大遼滅びて九百年、その間覺束なくも支那の典籍(6)によつてたつた五字しか傳はつて居ないこの『キタイ』の國のキタイな文字が、何千字となく峽谷深く秘められた碑石に在ると云ふので、吾等もそんなことを聞き噛つては、さてこそ、遼西の平野の向う幾百里、熱河の先きの山の奥にはそんなたいした石の資料があるも

のと、その地平線を望見しては、『時間』の歳月と『空間』の距離とによつて、遙けく秘められた漂渺たる世界を懐かしんでは談り合つて居たものだ。

それが天から降つたか、地から湧いたか、九・一八のズドンとともに、こゝ許奉天にヒョツコリと來てゐたと云ふことが知れたので、二度ビックリしたのも無理ならぬことであらう。

西歐では『通報』で、日本では『史林』で、東西の學界に放送せられて興味の對象となつたところに、碑石そのものが契丹文字幾千字を載せて奉天に現はれたと云ふ、この學問の研究と事變の推移との、變にこんがらがつた一事件に對し、そのきつかけをなし、最近の端緒をつくつて、一役を受持つた人が、即ちヘデインが『熱河』で出會つて、そこらを懇ろに案内してもらつたジョゼフ・ミュリー神父だつたのである。

ミュリー神父はケルキン神父の陵墓探險の後、これに對する自分の意見を書いた原稿を熱河から佛蘭西のペリオ博士に送つたらしかつたが、博士は自分の居住の移轉か何かでその遠來の原稿の一部を失つたと云ふことだ。で、恐らくミュリー師の歸歐後であらう、また師を煩はし書き直して貰つて、それにペリオ自身の所見を附記したものを、それからずつと後れた一九三三（昭和八）年、即ち碑石の奉天へ移つたことが世界周知のことゝなつてから、『遼の慶陵』の一と題する研究を『通報』に載せて居る。この全譯文も近く本誌に載せるつもりである。

序でに云ふが以上でその片鱗を窺えるやうに、『通報』は西歐支那學の權威的な學術雜誌で、滿洲だけについて云つてもシャバンヌの好太王碑探索の報告などもその當時この誌上で發表せられたもだ。奉天圖書館には幸ひその全部を揃へて居るが、既刊分の出物はまづ絶對にないので、この頃（例の北京の文殿閣名儀のものかと思ふが）影印複版が出て全部十冊で三百圓、既に四冊を出したさうだ。東京の丸善が最近發表した。〝Chinese Repository〟の複印事業と共に、學界以外に、日本一般の支那學に對する眞劍な要求に應えんとするものであらうと推せらるゝ。大連圖書館では往年柿沼館長が可なりな苦痛と犧牲とを忍び乍ら、〝Chinese Repository〟はその全部を購入してあつたので、今更あはてゝ複印本などに手を出す必要もなく、さすがに居然たる大圖書館の落ちつきを示して居る。

（1） Jehol. City of Emperors. By Sven Hedin London 1932

（2） The structural principles of the Chinese language. An introduction to the spoken language (Northern Pekingese dialect.) [By Joseph Mullie.]

（3） Les anciennes villes de Tʻoulice des Grands Leao 大遼 au royaume Mongol de Barin. Par Jos [eph] Mullie. Tʻoung Pao. 1922. vol. 21. 105—231P.

（4） 「史林」大正14年1月、第10卷1號、羽田亨—契丹文字の新資料

（5） Le tombeau de l'empereur Tao-tsong des Leao, et les premières inscriptions connues en écriture Kʻitan Par L. Ker[vyn].Tʻoung Pao. 1923. vol. 22. 292—301P.

（6） 「遼史拾遺」「補北錄」「補史會要」

（7） Les sépultures de Kʻing des Leao 遼慶陵 Par Joseph Mullie. Tʻoung Pao. 1933. vol. 30. 1—25P.

——『萩町夜話』その一——

Chinese Repository のこと

『チヤイニース・レポジトリー』を近く丸善から複印するつもりだと云ふことは曾つて新京に居る丸善支店の小笠原君から聽いてゐたが九月號の『學鐙』では、これを『支那叢書』と題し、東洋文庫を中心とする岩井主事その他の諸家のノート、解說を附けて、全四十卷、一部三百七十圓で豫約募集の發表をしてゐる。締切は十月三十一日と云ふから、こんなことを書いたものが世に出る頃は疾うに約束を纏め上げたあとになるが、それにしてもいゝことをして呉れたものだと感謝に堪へない。奉天圖書館の藏書として一部申込んだのは勿論だが、自分の私本としても別に一部約束をして置いた。

この支那研究の無盡藏の寶庫については、今更呶々する必要もないと思ふが、聽くところによるとこの原版一部が、若し出物があれば、世界市場では五千圓だと云ふ。それについて思出すことがある。たしか昭和四年の春だか、時の滿鐵副總裁松岡さんが、十萬圓をポンと投り出して、大連圖書館に漢籍を買はせたことがある。その時この『レポジトリー』が一部出物があつて二千八百圓とか云つて居たことは自分も聽いたが、とても金がないので及ばぬことだと斷念めて居た。ところが大連圖書館の柿沼君は不意に十萬圓と云ふ購書費を獲たので、三千圓足らず位、何とか融通がつくと思つたのであらう、この機逸すべからずで『レポジトリー』を手に入れた。それが決算と云ふことになつて、漢籍を買ふ等のものから融通はいけないとか何とか云ふ、事務當局の文句で、柿沼君が大に困つた、と云つたやうな風聞をきいたことがある。その眞偽の程は判らぬが、兎にかくその時分、恐らく二千八百圓かそれ以下で買つて置いた爲に、今日大連圖書館は時價五千圓とかに當る原刻本を擁して、世上の複印事業に目も呉れずに超然として居られるわけだ。

（藤）

遼の道宗皇帝の陵と契丹文字の最初の哀册

L, Kervyn.

最早半年以上も前に我等の協力者ヨゼフ・ミューリー師は手紙で一一〇一年に崩じた道宗皇帝の陵から二基の契丹文字の哀册が發見された事を報せてくれた。今日まで契丹文字と云へば唯五つの文字が書史會要の中で知られてゐたに過ぎなかっただけに、此の發見は眞に貴重なものである。然し我等はこの哀册の文字に就いて詳しく語る爲にミューリー師が拓本を送られん事を希望してゐる。或は近近に入手し得るかも知れない、こゝに掲げた一文は一九二三年六月の Le Bulletin Catholique de Pékin n°118, pages 236-243 に載せられたものである。これは特に言語學者に宛てたものではないが、眞に貴重な報告であるし、前記の北京カトリック敎報は東洋學者に知らるゝ所少い樣でもあるので、之を殆ど全部轉載させて戴く事は有意であると信ずる。Bulletin Catholique には一葉の圖版があり上は墓から出た小像と彫刻された板石等の寫眞で下は契丹文字の模寫を寫眞にしたものである。契丹文字は見た所女眞の小文字の樣である。不幸にしてこの筆寫を轉寫するには餘りにも不鮮明である。慶州や白塔子の位置については一九二二年の「通報」一〇五頁所載ミューリー師の地圖を參照されたい。私は歷史的、言語學的詳細な註記をした。なほ轉載に當つて固有名詞や日附の誤竝びに印刷の明かな間違ひ等を訂正した。P. Pelliot.

蒙古の西北部、巴林と烏珠穆沁の境界に位する白塔子（一一二〇年頃荒廢した古代の慶州の地、今日の林西、直隸の地方から約二十五支里ばかり離れた地點、寂漠たる谷とワーリンマンハの沙漠との間に在る山中で三つの古陵が發見された。その一つは九一六年から一一二五年まで支那の北部を統治した遼の契丹王朝の最後から二番目即ち八代目道宗皇帝（一〇五五—一一〇一）の中陵である。

此の地方の住民の言に依ればこの三陵には高價な寶物が藏されてゐたとの事で、金の机、銀の皿、硬玉の馬、磁器、宮廷の裝飾品、寶石、其他多種多樣の珍しい床飾等の名が擧げられた。斯程の寶物を長年月墓に埋めて腐朽させるのは全く以て勿體ない話だと彼等は言ふのだつた。一九二二年の春この地方から遠くない蒙古の領土内に居住してゐた支那人等は是等古美術品に魅せられ、之を掠奪しようと思ひ立つたのである。

……斯る羨望を起させた上記の帝陵は驚く程廣い地下室を成し、花崗岩の山の麓をくつと掘下げたもので、當時は用水溜の觀を呈し、墓室の圓天井の傾斜部の厚い煉瓦壁を貫いて昔貧慾家等が無益にも一つの天窓を作つて居り、數世期に亘る水の侵入を受け三途の川の永劫

の水の如く暗澹として眩暈する程の深淵を眼下に展開してゐた。此の八角形の謎の穴倉は五乃至六米の深さで最も深い所では九米もあり、恰ろしい水艦の如く緣まで水が充滿してゐて凡ゆる汲取法に對して挑戰するものゝ如くであつた。唯一つ大きな戸口の上枠は金色の龍で飾られ八角形の北側の水面上に現はれてゐた。

我等の墓掘に取づて最大の困難は、外から打ち見た所ではこの墓の部屋を空にすることであつた。岩石を穿つて小さなトンネルを一つ掘り穴の底部に達したら水はそれを傳つて外に流れるであらう、之がその時第一に考へられた最も簡單で且つ決定的な結果をもたらすものと思はれた。ところが此の企は實現出來なかつた。そこでサイフォン式の汲出しを試みたが之も成功しなかつた。此の種の幾度かの試みの後致し方なく支那式に水を汲出す事で滿足せねばならなかつた。卽ち卽製の柳の小さな手桶で有らん限りの腕力を出して汲出した。長いそして苦しい勞働を三十人位で一定時間づゝ交代でやつた。

徒刑囚の勞苦にも比すべき長日間の勞働であつたが、漸く水を汲み盡して得た結果はと言へば實に小さく、むしろ何もなかつたと言つてよい程であつた。此の堅牢で大きな部屋の中には粘り付くガラクタしか見出されなかつた。之では更に望むと望まぬとに拘はらず新しい勞働を余儀なくされたも同然である。云ふまでもなく此の異樣の殘骸、煉瓦や壁土泥土、石、腐木、種々雜多な破片等を除去することであつた。新に勇氣を奮起して其處から更に四方へ掘初めた。と云ふのは此の穴倉はこれだけでなく、こゝを中心として四つの入口が側面に開いて居り而もその地下道が全部同樣にガラクタで充滿してゐたのである。

約二ヶ月の後やつとの事で辛苦に滿ちた勞働を終つたのであるが、その結果判明したものは二つであつた。一つは巨人の手に成る驚嘆すべきカタコンブであるこの陵の測圖であり、將にアジアの專制君主の所業に相應しきものであつた。次に空虛と言つてよいまでの掠奪の跡であつた事を特記せねばならぬ。我等の長い勞苦に對する報酬はたゞそだけあつたのか!?

道宗皇帝の陵は坑道式のもので 8 Pieds 2.70m の幅であるが長さは昔は六〇乃至七〇米あつたであらう。それのほゞ中央部を並行する三本の小地下道が直角に橫切つてゐる。此の三本の地下道の端は同じく八角形の大小の部屋を成し、昔は鐵の大戸扉でしきられてゐたのであらうが今日は泥中に埋つてゐる。昔日の崩壞と相續く破壞とで全く姿を消した大地下道の入口は別として、中央の四辻になつた所の大きな部屋を合せて全部で八つの部屋がある譯となる。北側の奥と中央の四辻とは同大の部屋でこの四辻の部屋が昔蒙古人によつて天窓がつくられた所であり我々が今日仕事を初めた場所なのである。山の大なる重壓に堪ふべく此の陵も堅固に出來てゐて、永久性のものと言つて差支ない。厚いそして破壞不可能の青色の煉瓦壁で堅め、其の上を全部長サ三米、厚サ一七糎幅二七糎の貴重にして且つ芳香ある柏木の厚板で張りつめ、猶ほそれに金銀を被せた釘で不朽とも稱すべきものであつた。木や羽目板の金銀被ひは溝と筒とで接ぎ合せてあり、煉瓦にしろ木材にしろ數世期持續出來るものなのである。

皇帝の靈柩は掘出したのは唯一つであつたが、正方形の大箱で奥の部屋に蓋が開いたまゝ橫はつてゐた。頭のない骸骨が地上に散かつて居る。我等の苦力頭は迷信的不安からか或は畏敬の念からしてか兎に角遠くへ走り去つた。

苦力等は期待した寶物は掘出せず泥まみれの木片を得たゞけである。この仕事は確かに骨の折れるものではあつたが、彼等にとつては大きな

利益ともなつた。それはこの木片は貴重なもので、まだ立派に使用出來るものであり、特に靈柩用材として高價で賣拂ふことが出來たからである。

我々が長年この種の事業即ち古墳の發掘に對して最大の關心を有するのは勿論であるが、然し遠くからそして又窃かにしか行動出來ないのである。我々は一つの念願、執着とも云ふべきものを有してゐた。それは以前我々の同僚の一人が遼史の研究によつて、契丹の道宗皇帝の陵中に記錄が見出されるであらうと語つた事を知つてゐたからである。紙に書いてあるか或は石に刻んであるか、いづれにせよ此の記錄は我々に取つては墓室の用材がよしやチーク材であらうとそれよりは餘程重要なものであつたのである。然しそれに如何にして手をつけるか？

我々は非常に困難な立場にあつた。舞臺は皇帝の墓である。而も住民からは猜な眼を以つて見られる仕事なのである。所が僥倖とでも云はうか絶好の機會がめぐつて來た。

この仕事に取掛つた時勞働者等が、一度蒙古兵に消拂はれたことがあつたが、彼等は危險が去ると見るや一人二人と元の仕事場に歸つて來た。其後暫くすると此の幾組かの作業班の間に競爭が初まつた。その上此の國の憲兵の干渉が初まり仕事を中止せよと威嚇された。終ひには墓を自分一個人の利益にしようと望んだ林西省の官吏が支那兵を遣り、作業班の頭目等を町の牢獄に曳いた。そこで仕事は一時停止され數名の善良な人物が命ぜられて墓の番に當つた。我等はこの好機逸すべからずとなし三人の支那人を派遣して下士官たちの面前で我々が切望してやまなかつた四個の哀册を泥の中から掘出す事に成功したのである。

三人がサムソン程の大力を有ち合せない以上、是等の石を擔いで地下道を通り足場もなく地上六米もある所に日を開いてゐる天窓まで引揚げる事等出來る話ではない。重量は各々六〇〇乃至七〇〇瓩ある。それで終日其處に据置いて寫眞を撮つた。もとより仕事は急がねばならぬ。彼等三人の中誰も拓本を取り得る者がなかつたので之を忠實に模寫した。この模寫に五日を費した。仕事は細心に而も敏速に運ばねばならぬ。何故なら一つには障害の起る懸念があり、他の一つには好奇會はこの時に限られてゐると云ふことが分つてゐたからである。この二つの臆測は一一實現した。書き初めて二日後、釋放された頭目等が墓に戻つて來た。そして抗議し激怒し罵詈し威嚇する。尤もそれは彼等の喋舌り損に終つたが、我等の三人は一人が哀册の上に跼んで極めて冷靜に模寫する間に他の二人はその向側に拳銃を擬して立つた。之が一番手取早い威嚇法である。この勇敢な行動に對しては誰一人として邪魔し得なかつたので、仕事も至極平靜に完了することが出來た。その間に苦力等は彼等の利益になる木材類の搬出を行つたのである。

茲に於いて遼史に記載された記錄物は遺宗皇帝の陵から確かに發見されたわけである。即ち二つは支那語、他の二つは契丹語であつた。後者は語學上最も價値あるものであつた。何故なら今日まで五文字しか知られてゐなかつたのであるから。所が一九二二年六月二十一日に至つて俄然この二つの記錄によつて約五八三字と八五六字の多きを發見出來たのである。西夏文字や女眞文字の如く意標文字であるが、今日では頗る難解である。之等は碑石に似た固い白色の石（支那で言ふ雪花石の方形二個の石に彫られてゐる。哀册は長さ1.35m、厚さ8 Pouces (27cm)である。長年月の間に破片類の接觸や圓天井の崩壞等によつて記錄の消滅や潰滅を防ぐ爲に、彫刻師等は賢明な防護策を講じて、この大きな石を土の上に横へ他の同樣に堅い材で出來、槞は斜をつけ立派

な彫刻を施した板石を葉蓋となし、而も哀册の槞に緊き合せた大きな一圓錢を並べ、合せ目の間隙を作つて文字を保護するといふ方法を選んだ。この古錢は恐らく記念に造つた單なるメダルであらうと思はれるが、道宗皇帝の「清寧元年」一〇五五年、並びに「大康」一〇七五年の年號が記されてゐる。

眞にこの發掘は驚異のものであり、これ（中陵）より少々遲れて發掘された直ぐ近くに在る東陵や西陵よりは價値多きものであつた。この兩陵からは漢字の哀册しか出なかつた。

掠奪者等は各自の利益の爲に他の總ての部屋の木材類を持去つたが、これを最後に仕事も決定的に終りを告げた。中陵の哀册は泥中から取出され、苦力等は貴重な木材を金にすべく其處を去つたが、山から來る水はやがてまた已が古き「地下の帝國」に網槞を掘つたのである。……

（平山和巳譯）

海外トピック

○グーテンベルヒ印刷の稀覯本發見さる

防空訓練のお蔭で日本にたつた一册といふ貴重な書籍が發見された。東洋第一の藏書を誇る京都帝大圖書館では百三十萬册の書籍だけは特別地下室を作つて收容するか、丹波の演習林に移すかして完全保護を圖るべく先般の防空訓練中に貴重書籍の調査を行つた處、西紀一四七五年ドイツで印刷された聖アウグスチヌスの「キンカギンダ」（五十葉華と云はる）で、今日まで日本にある活字印刷本のうち最古とされてゐた西紀一五〇二年に印刷された「ダンテ神曲」（大阪のダンテ蒐集家故大賀壽吉氏から京大圖書館へ寄託）より二十七年古く現在まで歐米各國圖書館を通じて三十八册しか知られて居ない。これは世界各國で「グーテンベルヒ」の「世紀のもの」として珍重されてゐるものである。而もこの書はドイツで出した「古判」本目錄に依り原本であり且完本であることが確認された。（日本カトリック新聞）

○ルーヴアン圖書館燒失

ドイツ占領地となつてゐるベルギーのブラッセルにあるルーヴアン圖書館（Louvain Library）は最近火災に遇ひ、藏書七十二萬を失つた。

（英文大阪毎日）

○援蔣アメリカ圖書館界

アメリカ圖書館界では苦悶に喘ぐ重慶政權下の圖書館界へ僅か乍らもスミソニアン協會の國際圖書交換局を通じて、香港またはビルマ路から圖書を供給してゐるが、支那側ではこれに對する感謝の印として昨年六月のボストンに於けるA、L、A大會に苦しい財布をはたいて小さな銀盃をアメリカ圖書館協會へ贈つた。（ライブラリーデヤーナル）

一人の防諜
萬の兵力

收書月報

第七十號



滿鐵
奉天圖書館

昭和十一年八月十二日第三種郵便物認可
昭和十六年十一月十日發行（毎月一回十日發行）

昭和十一年八月十二日第三種郵便物認可
昭和十六年十一月十日發行（毎月一回十日發行）

電話
公衆
二四九三一
三三二三
三三〇七

收書月報

第七十號

目次

遼の哀冊發見の端緒……衞藤利夫 (2)
契丹文字の哀冊……平山和巳 (8)
日本出版界の現狀……中田邦造 (12)
諸列强の極東進出(下)……布村一夫 (17)
空襲下の英國圖書館(下)……中村道岡 (24)
◇十月のメモから……(27)
增加圖書目錄(第七十號)……左頁

